

NO₂-N、NO₃-N、PO₄-Pは1979年8月よりStrickland & Parsons(1968)の方法により測定し、それらの結果は表-8(2)に示した。

表-8(2) NO₂-N、NO₃-N、PO₄-P 測定量 (1979年)

単位: $\mu\text{gat}/\ell$

測定項目	月・日	8. 30	10. 31	12. 25
st. 0	NO ₂ -N (表)		0.05	0.04
	" (底)		0.09	0.06
	NO ₃ -N (表)		0.53	0.39
	" (底)		0.36	0.28
	PO ₄ -P (表)		0.06	0.09
	" (底)		0.04	0.08
st. 7	NO ₂ -N (表)	0.05	0.09	0.08
	NO ₃ -N (表)	1.11	0.55	0.23
	PO ₄ -P (表)	0.86	0.05	0.04
st. 20	NO ₂ -N (表)		0.04	
	" (底)		0.08	
	NO ₃ -N (表)		0.31	
	" (底)		0.51	
	PO ₄ -P (表)		0.06	
	" (底)		0.03	

〔要 約〕

- (1) 植物調査を1979年5月、9月、11月、1980年2月の4回実施した。出現種数は藍藻7種、緑藻30種、褐藻11種、紅藻36種、海草7種であった。海草の現在量は夏に増加し、冬に減少した。特に地上部の変動が大きかった。
- (2) 小型桁網を1979年7月から1980年1月までの間2ヶ月ごとに保護水面内のアジモ場に設置して漁獲試験を行なった。漁獲種数・個体数総重量ともに夏多く、冬少なかった。漁獲魚には、オキザヨリ・アイゴ・ネズミフグ・ホシサヨリ・アオリイカなどのように全期間出現するものと、ヒメツバメウオ・アカカマス・イスズミのようにある期間に限り出現するものがあった。
- (3) 漁獲試験で漁獲した魚類の胃内容物についても調査した。漁獲魚は胃内容物組成から、オキザヨリ・オニカマスのような魚食魚、ボラ・ヒトヅラハリセンボンのような底生動物食性魚、ヒメツバメウオのような雑食性魚、ホシサヨリ・アイゴのような植物食性魚の4つのグループに分類できる。また当地域では、海草が重要な餌の一つであると考えられる。
- (4) アジモ場とアジモ場沖の砂質底で底生動物の調査を行なった。アジモ場では多毛類・貧毛類・端脚類が多く、砂質底では多毛類が多かった。また底生動物の生息密度・現存量ともにアジモ場の方が砂質底よりも大きな値を示した。